

あいち病害虫情報 最新情報

令和5年6月16日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

向こう1か月の気温は高い

東海地方は5月29日ごろに梅雨入りしたと見られます。6月15日名古屋地方気象台発表の1か月予報によれば、向こう1か月の天候は、暖かい空気に覆われやすいため、気温は高く、平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されています。

イネいもち病（葉いもち）

BLASTAMを用いた葉いもち感染好適日の判定によれば、5月下旬以降、県内の複数地点で好適日となった日が7回ありました。好適日が連続して出現している地点もあります。今後のほ場での発生状況に注意し、初発生を確認したら適切に防除しましょう。特に葉いもちを対象とした育苗箱施薬をしていない場合は、葉いもちの早期発見、早期防除に心がけましょう。なお、本日発表の「イネいもち病（葉いもち）情報第1号」に葉いもち感染好適日の判定結果を掲載しましたので、参考にしてください。

イネ縞葉枯病

5月上旬から5月中旬にかけて県内22地点のムギ類ほ場から採取したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率は1.89%（平年4.72%、前年3.22%）でやや低い状況でした。しかし、西三河の一部地域では高い値となっています。「コシヒカリ」など本病に弱い品種では注意が必要です。詳細は、本日発表の「イネ縞葉枯病情報第1号」を参照してください。

イネ白葉枯病

昨年、尾張及び西三河の一部地域においてイネ白葉枯病が発生しました。昨年発生が多かったほ場では、出穂3～4週間前に防除を行いましょう。また、本病は、畦畔や水路に自生するサヤヌカグサが第一次伝染源であるため、畦畔除草を徹底しましょう。

トビイロウンカ等の飛来状況

トビイロウンカ及びセジロウンカは、梅雨前線の活動に伴い断続的に飛来します。両種とも5月下旬の本田調査では確認されていませんが、予察灯では6月11日に東三河地域でセジロウンカが1頭誘殺されています。また、日本植物防疫協会提供のウンカ飛来解析によると、6月16日の時点で本県へのトビイロウンカ及びセジロウンカの飛来に適した気象条件は1回（6月9日）出現しています。ほ場での発生動向に十分注意するとともに、今後、本県が発表するウンカ類に関する情報を確認してください。

斑点米カメムシ類

予察灯において、ミナミアオカメムシやカスミカメ類が誘殺されています。ミナミアオカメムシは、コムギ収穫後、タデ科雑草やネズミムギ（イタリアンライグラス）等で生息しています。また、その他の斑点米カメムシ類は、畦畔、土手及び休耕田などで出穂したイネ科の雑草で繁殖します。ほ場周辺の除草を徹底し、繁殖を未然に防ぎましょう。

果樹の病害

梅雨に入っています。降雨による病気の伝染に注意しましょう。

ブドウ黒とう病の6月上旬の発病新梢率は過去10年で最も高い状況です。本病は降雨が続くと多発するため、梅雨の晴れ間を利用して防除を実施しましょう。詳細は本日発表の「令和5年度病害虫発生予察注意報第3号」を参照してください。

ブドウべと病は、この時期の降雨で急激に発生が拡大します。発病部位は見つけ次第除去し、適切に処分するとともに速やかに防除しましょう。

ブドウ晩腐病の病原菌の胞子は、6月から7月に最も多く飛散するため、この時期に降雨が多いと発生が多くなります。昨年発生が多かったほ場では特に注意し、発病果房は見つけ次第除去するとともに、防除を実施しましょう。

ナシ黒星病は降雨により胞子が飛散し、発生が拡大します。幸水では、この時期から再び果実が本病に侵されやすくなります。昨年多発したほ場では特に注意し、防除を徹底しましょう。

モモせん孔細菌病は風を伴った雨で発生が拡大します。風当たりの強いほ場では特に注意しましょう。本病の主な伝染源は枝病斑です。見つけ次第除去しましょう。品種によっては収穫が始まっていますので、農薬の使用にあたっては収穫前日数や周囲への飛散に注意しましょう。

カキの角斑落葉病菌及び円星落葉病菌の胞子は、6月上旬から7月中旬に最も多く飛散し、感染します。予防に重点をおいて、防除を実施しましょう。

チャノキイロアザミウマ

6月上旬にブドウ周囲のイヌマキ（防風垣）でチャノキイロアザミウマ生息調査（10新梢の払い落とし虫数）を行った結果、平年と比較してやや少ない状況でした。

黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマ成虫の誘殺数は、蒲郡市及び南知多町（カンキツほ場に設置）において増加傾向となっています。

本種は軟弱な葉や新梢で増殖しますので、不要な枝は取り除くなど栽培管理に注意しましょう。ブドウでは、袋かけまでの防除を徹底しましょう。ウンシュウミカンでは、6月上旬から7月にかけて果梗部の被害が発生しやすくなります。

本種の防除適期は成虫の発生ピークです。表の発生ピーク予測日を参考に防除しましょう。

表 チャノキイロアザミウマ成虫の発生予測ピーク日

	愛西	南知多	名古屋	大府	豊田	岡崎	蒲郡	豊橋	新城	伊良湖	稲武
第2世代	6/11	6/11	6/5	6/7	6/10	6/11	6/9	6/9	6/13	6/9	第1世代 6/7
第3世代	7/3	7/4	6/28	6/29	7/3	7/3	7/2	7/2	7/6	7/2	第2世代 7/6
(前年)	7/5	7/5	6/30	7/1	7/5	7/6	7/3	7/4	7/8	7/4	(前年) 7/4
前年差	2日早	1日早	2日早	2日早	2日早	3日早	1日早	2日早	2日早	2日早	前年差 2日遅

各地のアメダス平均気温から予測。6月15日までは実測値を、それ以降は平年値を用いて計算。

前年の第3世代は、前年気温の実測値を用いて計算。

ナシヒメシンクイ

フェロモントラップにおける6月上旬のナシヒメシンクイの誘殺数は平年並の状況ですが、越冬世代成虫の誘殺がやや多かったため、今後発生が増加する可能性があります。今後は途切れなく発生し、世代数を重ねるほど虫の密度が高くなります。モモ、ナシでは果実が食害されますので、収穫前日数に注意して防除しましょう。

アブラナ科野菜のチョウ目害虫

キャベツなどのアブラナ科野菜の残渣は、秋冬作におけるコナガなどチョウ目害虫の発生源となります。収穫終了後は残渣を適切に処分しましょう。

施設野菜のウイルス病の伝染源を減らしましょう！

施設トマト（促成・半促成栽培）の栽培が終了する時期です。タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病の病原ウイルス（TYLCV）、コナジラミ類はトマト黄化病（TOCV）を伝搬します。次作トマトが黄化葉巻病や黄化病に感染しないように、また、薬剤感受性低下個体群の野外への定着を防ぐためにも栽培終了後、施設を密閉してコナジラミ類を死滅させ、発病株は適切に処分しましょう。

施設キュウリでは、ミナミキイロアザミウマがキュウリ黄化えそ病の病原ウイルス（MYSV）を伝搬します。次作キュウリが黄化えそ病に感染しないよう、栽培終了後、施設を密閉してミナミキイロアザミウマを死滅させ、発病株は適切に処分しましょう。

イチゴの病害虫

炭疽病は、育苗初期からの予防を主体とした防除が重要です。親株床は雨よけ等によって伝染を防ぎ、ランナー伸長期から育苗終了まで予防剤で定期的に防除しましょう。罹病株は見つけ次第直ちに取り除き、適切に処分しましょう。

ハダニ類は乾燥条件を好みます。空梅雨の場合、好適な条件となるので、親株床での発生状況に注意し、防除を徹底しましょう。

トマトキバガ

トマトやナス、ばれいしょ等のナス科作物を加害する侵入害虫です。国内では令和3年に初発生が確認され、その後は九州地方を中心に侵入警戒トラップでの誘殺が確認されています。愛知県では令和5年5月に侵入警戒トラップを4カ所に設置しました。現在、誘殺は確認されていませんが、今後注意が必要です。葉に「えかき」症状（ハモグリバエ類によるものより幅広い食入痕）や果実への食入（数mm程度の小さい穴）など発生が疑われる症状がありましたら、お近くの農業改良普及課や病害虫防除室などへご連絡ください。

トマトキバガの詳細については、各県から発表されている特殊報や、農林水産省Webサイトに公表されている以下の資料を参照してください。

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kaigai/attach/pdf/index-3.pdf

サツマイモ基腐病

平成30年に国内で初確認され、愛知県でも令和4年10月に発生を確認しています。感染防止のため早期発見に努め、葉のしおれや黄化、株元の変色などが見つかった場合は発生株を適切に処分しましょう。詳しくは令和5年4月21日発表「サツマイモ基腐病情報第1号（サツマイモ）」を参照してください。

キクの病害虫

白さび病は例年、梅雨期に感染が多くなります。発病が見られるほ場では、被害葉を切除して適切に処分するとともに、同一系統薬剤の連用を避けて防除しましょう。

予察灯、フェロモントラップなどの各種調査データは、ホームページ「あいち病害虫情報」（アドレス：<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/index.html>）を参照してください。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室 TEL 0561-62-0085 内線471 FAX 0561-63-7820
